令和の「父子鷹」物語

上原 昇（２組）

勝小吉と麟太郎（後の海舟）父子を描いた子母澤寛による『父子鷹』という小説（1955-56 年、読売新聞に連載）があります。「父子鷹」は共に優れた能力を持つ父と子のことを言う言葉のようでもあります。

同期で歯科医師の布施修一郎君（6 組）の父、祐一さんも同窓 34 期の元歯科医師です。

この度、104 歳でご存命の祐一さんと長男の修一郎君の共作による特別寄稿が地元歯科医の専門誌「信州歯報」に掲載されました。

タイトルは「戦時下での新卒歯科医の動向 陸軍歯科医将校時代から終戦まで」というものです。65 期 HP では、10 月 12 日付で修一郎君にその経緯を投稿してもらいましたので、興味のある方はご覧ください。

寄稿の元となったのは、お二人の出身校、東京歯科大（旧東京歯科医専）の学報「歯科学報」からの取材に祐一さんが答え、それを修一郎君が文章化したものです。

今年の 8 月に刊行された同学報第 122 巻「戦時下の歯科医学教育 第 7 編」も 65 期 HP で検索することができます。

今年は戦後 77 年ということで、これまで戦争中の出来事がいろいろな形で活字化・映像化されて目にすることも多いです。

近現代史の研究家で作家の保阪正康（1939 年～）という人がいます。彼は数多くの戦争関連の著書を世に送っていますが、その中で軍人をはじめとした関係者から直接聞き出した証言をオラルヒストリーとして紹介しています。ただ、保阪氏に言わせると「元軍人の証言は嘘が多いので信用できないものが多い」とも述べています。言いたくないことや言えないことがそうさせるのでしょう。

それに比べて、今回の布施祐一氏の記憶から編み出された一つひとつの挿話は 80 年前のこととは思えないほど真に迫って、読む人の胸に迫ってきます。父親の言葉を正確かつ緻密に文章化した息子の努力にも頭が下がります。

今回の戦時下の回想録の仕事はまさに、二人合わせて 178 歳となる“令和の「父子鷹」物語”とでもいえる奇跡のようにも思われます。

なお、ネット検索していたら、今年の敬老の日、上田のある施設で高齢者のお祝いが開かれ、そこでの入居者最高齢が 104 歳の布施祐一さんという SBC(信越放送)の報道にヒットしました。https://newsdig.tbs.co.jp/articles/-/157291?display=1

（22 年 10 月 13 日記）

以上